

# 27P-am230

海洋由来真菌が産生する新規アミノリポペプチド trichoderin 類の抗結核活性  
荒井 雅吉<sup>1</sup>, ○Pruksakorn PATAMAPORN<sup>1</sup>, 古徳 直之<sup>1</sup>, 小林 資正<sup>1</sup>(<sup>1</sup>阪大院薬)

【目的】結核菌は宿主に感染後、その免疫応答により形成される granuloma 内において、低酸素状況下、長期に渡り潜在する特徴を持ち、このことが化学療法を困難にする主因となっている。今回我々は、海洋由来微生物の培養抽出物ライブラリーから、潜在性結核菌に有効な抗菌物質を探索した。

【方法】検定菌に *Mycobacterium smegmatis* および *M. bovis* BCG を使用し、isoniazid の最小生育阻止濃度(MIC)を好気条件の 10 倍以上に上昇させる 0.2%の低酸素条件下、MTT を用いる比色定量法により MIC を算出した。

【結果・考察】海洋由来真菌 *Trichoderma sp.* 05FI48 株の培養抽出物に活性を見出した。2-butanone 抽出物(6.0 g)を活性試験の結果を指標に、溶媒分配、各種クロマトグロフィーで精製した。その結果、trichoderin A (**1**)(16 mg)、A1 (**2**)(7 mg)および B (**3**)(4 mg)と命名した新規アミノリポペプチドを単離し、それらの化学構造を決定した。最も活性が強かった**1**は、検定菌に対し、好気および低酸素の両条件下、0.02  $\mu\text{g}/\text{ml}$ ~0.1  $\mu\text{g}/\text{ml}$  の MIC を示した。

